「寓喩」の原エクリチュール

――小島信夫「島」をめぐって

疋田雅昭

0

小島信夫の最初期の長篇小説に「島」（『群像』一九五五年八月～一二月、翌年の一九五六年二月に大日本雄弁会講談社から単行本として刊行）というテクストがある。

小島自身は何度か書き下ろされる「自己解説」の中で、当時「SF」であるとか「アレゴリー」であるとか言ったこのテクストに寄せられた多くの批評を想起しながらも、作風に対して絶対的な自信をのぞかせている。

春日武彦は『長篇集成』の「解説」[1]で、当時の理解不可能性が「カフカ的」という言葉に集約されていたことにふれながら、このテクストの魅力を題材に比したその文体の「ユーモア」に見出している。ややエッセイ的な分量ではありながらも、小島の多くの長篇にふれている千石英世[2]も、「アメリカンスクール」以前となる本作にはふれていないが、初期の時期の特徴を「ユーモア」の側面からみていることは同様なようだ。

だが、「島」と続く「裁判」という二つの長篇は、小島の仕事の全体像を描くためには、初期短篇とともにもっと検討される必要がある。とくに「寓意」をめぐって、前者は政治的、社会的な面、後者は家族、愛情、性愛といった面から、重要な示唆を与えてくれる。そして何よりも、精読に堪えうる強度があるテクストであるにもかかわらず、具体的な内容面における検討がなされていない。その背景には、小島の政治的寓意が「家族」の問題によってどんどん後景化していったことの影響があることは間違いない。だが、「後景化」とは、その存在を消し去ったという意味ではない。むしろ、潜在化あるいは偏在化といってもよいこの政治性の問題を、本論では「島」の精読を通じて考えて見たい。

1　歴史と噂　あるいは　経済システムの流入

物語は「私」と称する人物を視点人物として、ある島に二艘の漁船が戻ってきた場面から始まる。（末尾数字は引用元の頁数）

あるうららかな秋の日の夕刻に、数日前にこの村を出た漁船の二艘がもどってきた。私の家は村の南側にあるが、両側にある少しつき出た丘にのぼると、遥か北の海から帰る私たちの漁船の姿が見えるわけである。漁から帰る時には、船の中からいつも歌声が聞える。そうした歌声はこの村のいくつかの歌の中の一つだが、彼らの沖の潮風できたえた声は、百姓たちが野良で、収穫が近づくと十日に一度ぐらいドナるように歌う声と共に、とにかくこの村の祭になくてはならないものなのだ。（15）

海に向かってのみ開けていたこの島は、非常に閉鎖的な空間として描かれている。島では漁師はすっかり人気がない職となっていた。原因は近海で魚がとれないことに加え、昔遠方の海に出かけた漁師たちが「半殺し」になって戻ってきたという「噂」が村に蔓延しているからだ。

「半殺し」になる時に聞かされた「お前たちはここへ来るケンリはない」という言葉が村に伝わり、この事件は「ケンリ事件」と称されている。「ケンリ」という片仮名の表記は、そもそも島人たちの言葉に「権利」という語彙がないことを示す。喧嘩をさしたり、子供たちの陣取りの遊びの名前に使われたり、事件で死んだ漁師たちの墓参りを「ケンリ参り」などと、「ケンリ」という言葉は島では争いに関する独特の使われ方をしている。

島での習慣※伝説は、「噂」という音声言語によって支配されており、「噂」はその起源（根拠）が消失しているがゆえに、人々に強い影響力を有している。

「私の父」は、そんな「噂」を集め、文字として書きつけている島では稀有な存在である。彼の記録は「本島噂話集」と名付けられている。

村長、第××代英五郎氏ハ「ケンリ遭難」後ハ、日夜、考エツヅケラレタ。自分ノ村ノ者ガ殺サレタリ、ヒドイ目ニアッタリスルコトハ、ツライコトジャ、ト申サレタ。マタ、自分ノ家ノ者ガソウシタ目ニアウノト同ジヨウニ腹ガ立ツテ、マルデ自分ガ殺サレタ、ト同ジダトモ申サレタ。（17）

「本島噂話集」はカタカナ漢字混じりの文体で書かれている。だが、漢文訓読体のような正式な形式を有しているというよりは、話言葉をそのまま記録したような文体である。

父は噂を、何年かかったかよくおぼえていないが、その著書の中に吸収し尽してしまうと、村人といっしょに、父さえも忘れてしまった。そうしてたぶん、村人はその噂話の種本が公開されるぐらいに思って心を許したことになる。父も結果から云うと、自から気を許して、忘れるためにその中に文字にしてしまったのだ。（17）

通常文字は記録に使用されるわけだから「忘れない」ために書き残されるものだ。しかし、ここでは書いてしまったが故に忘れ去られてしまう。「起源」を失った言葉（ペロール）（噂話）は、その無起源性がゆえに人々に信じられているという逆説的な状況を生み出し

ている。

「本島噂話集」によると、村には元来「武器」が存在しなかった。つまり、殺人という行為が存在しなかったのだ。村長が竹の切り株に刺さって大けがした事件がきっかけで考案された「竹槍」がこの村で初めてつくられた武器（＝殺人道具）である。「武器」の創造は島に「敵」という概念を生み出したが、「敵」への「復讐」は恐らく果たされなかったというのが、「本島噂話集」の記述の空白を埋める「私」の見解である。この村長は「敵」に会わないようにするために「敵は存在しなかった」という「事実」を「噂」として広め、自らの島と近海に自閉するという選択をしたのだ。

結果、村に残ったのは、「竹槍」という「武器」と、「人殺し」「敵」という概念のみであった。村長は結果的に村で最初の殺人事件の被害者になった。だが、起源（犯人）は分からずじまいとなり、事件そのものも記録となることで、村人の記憶から薄れていった。

こんな昔話の挿話（に対する見解）が差し挟まれた後、物語は最初の漁民たちの帰港の場面に戻る。この漁師たちは、いつものように魚をとれなかったのだが、なぜか沢山の米を島に持ち帰ってきた。当初、村長は島の農民の米が盗まれたのではないかと考えた。その理由は同じ米にしか見えないからだが、流石に米などどれも同じに見えることは明白な事実であり、漁民の網元はその話では押し通せないと考えた。そこで「本島噂話集」にその記述がないか、父に尋ねに来ることになる。

一見奇妙にみえる村長の対応だが、村長にとってこの前代未聞の米の事件は急を要する一大事なのである。実は流通貨幣をほぼ持たないこの島にとって、米とは最も重要な経済的指標である。その昔、中国や朝鮮、日本の税制が租庸調であったことを考えればよく分かる。島における米の流通は農民が生産する一定量のものに賄われており、それを得るために漁民たちは魚をとってくる必要があったわけだ。米が島の内部の交換と消費に限定されていれば、それは物々交換システムであることと変わらない。物語では島の住民は基本、漁民であるか農民であるかだ。だが、米が外部から入ってくることは、そういった循環システムを破壊することになる。

だが、「本島噂話集」もこの事態に何のヒントも与えてはくれなかった。村長も村の唯一の記録者である父も、この事態の前にただ途方にくれるだけであった。

大量の米を持ち帰った若い漁民たちは、それを浪費することにより自堕落な生活を送るが、半年ほどして自ら持ち帰った米が枯渇すると、再び漁に出かける。

2　会議よりも噂に信がある世界

二度目の漁に出た若い漁民たちは、その後帰って来なかった。取り残された老いた漁民たちは、農民の仕事に従事しようとしたが、農民たちは老漁民たちに仕事を与えず、困った漁民たちは沿岸の崖の上の痩せた土地を田にしてみるが、作物は育たない。

若い漁民の事件以来、漁民たちの存在そのものを忘れかけていた農民たちは、そもそも痩せている土地の不作などに関心を示す

ことはなかったが、実はこれは島全体に広がることになる事態の凶兆であることに誰も気が付かない。

村長は祈祷により山頂から米が降ってくるという、自作自演の「奇蹟」をやってのけ、米を貧窮する漁民に配布するものの、村長への不信感は払拭されることはない。

島の人々の意思決定は「噂」によって成り立つ。村長の自作自演の演技も、そういった島の事情が反映している。なので、事実よりも、人々の信を得ることが出来る「真実」の方が強い力を持つ。その理由の一つは、この島では「会議」という習慣がないからだ。

「そんな煙が何のことがあるものか。現にわしたちの作物には何の害もないではないか、そいつを一番はじめにいい出したやつは誰だ」

「あの場所が枯れたのは、枯れるのが当り前じゃないか」

（49）

「会議」は責任者の追及に終始し、なんら対策も方針もたつことはない。未知な出来事に対応するための歴史的蓄積（文字による公的記録）を持たない人々は、現前しては消えてゆく、起源のない共有されたパロールにこそ信を置く。

引用される会議の一場面では「煙」という「噂」が出ているようだが、ここまでしか読んでいない読者にはその意味が分からない。一方で島民たちにとっても「煙」の「噂」はまだ信を得るものではない。

村長の密かな「判断」は、とにかく今ある村の米を早々に収穫してしまうというものであった。村長は父を経由した「下男」に命じ、大雨が降るという「噂」を村に流す。この「下男」は「噂」を広める能力があるのだという。

彼らは刈入れを終えてから毎日のように溜息をつき、南の空から雨雲があらわれるのを待っていたのである。私はいっておかなければならぬことは、父もまたやはり村人たちとおなじように空を見上げていたことである。彼は平年の刈入れの時期がすんでも、率先して南の空を毎日ながめていた。そして誰よりも深い溜息をついていたのである。

（52）

村人は父の「予言」を信じたのではない。父が下男に広めさせた「噂」を信じたのだ。だから、「噂」が間違ったことではなく「噂」が「実現」しなかった「現実」の方を悲しむのである。この状況を我々が「転倒」と呼ぶのは、言語がコンスタティブに現実を「映す／映さない」と考えているからであるが、村民たちは言語が現実をパフォーマティブに創ると考えているのだとしたら、言語論的転回を経ている現在、本当に「転倒」しているのはどちらなのだろうか。

我々は、それがたとえ少数であっても、より論理的な判断に従っていると言えるか。非合理的にもかかわらず多くの人々を魅了する「物語」が集合知をつかさどっているとはいえないだろうか。戦後社会の価値観の反転は恐らく多くの人々にこの疑念を突きつけていたはずである。その意味でも、この物語の設定はアクチュ

アルだったのだ。

若い漁民が失踪してしばらくしてから、村のいたるところに「闖入者」がいることが感じられるようになった。それは理由の分からない「臭い」であった。だんだんと深刻さが増してゆく「臭い」であったが、未知のものである以上、村の「噂」はやはりこの「臭い」の正体も対策も「確定」することはできなかった。ただし、確定できなかった理由の一つには、意思決定の影にあった二人の人物、父と村長が半年前から、若い漁民たちのように、出奔していたことがあった。

3　噂が人々を支配する

「臭い」が広まっていた島では、島民の暮らす場所は海上に移り、常に元いた島を見つめながら生活することが日常となった。人々は対策に「ハッカ」を用いるようになった。この島が以前にハッカを島外に「輸出」していたという内容が書かれているわけではないが、実はハッカは日本近代と密接に関係した産業であった。明治期に山形のハッカの取卸油がイギリスへ輸出されるようになり、気候風土の関係で主要な産地が北海道に移る。このハッカは北見ハッカと呼ばれ、一九三八年には世界の生産量の七〇％を占めるようになる。戦後は、ブラジルや中国の安価なものに押され、国内ハッカの輸出は衰退してゆくことになるが、ハッカは近代日本の欧米に対する主要な輸出品であったのだ。この物語の寓喩性は、戦後日本社会と重なってゆくものであるが、一方では近代国民国家の姿とも重なっているのだ。

船で避難している私は、村長についていた男（権三）に、以下のような「噂」を島にいる甚太（下男）に伝えるように言われる。

一、臭いは近いうちに消える。
二、臭いはなかなか消えない。
三、竹槍の練習をしている人がいる。
四、村長らが帰ってくると、臭いは消える。
五、村長らは臭いをかがなくて、ヒドイやつらだ。
六、村長らは死んだ。
七、若い漁夫らが臭いを起している。　（62）

矛盾をはらんだこれらの「噂」は同時に伝わることにより、双方がもう一方の矛盾する「噂」の信憑性をあげている。正の根拠は誤の反対であるからという訳である。これらの噂は、「臭い」「村長ら」「漁夫」に対する「期待／不安」と「期待／憎悪」をあおり本来無関係かもしれないこれらの要素を結び付けて考えることに島人たちを誘導している。

辻岡美延と西田晃一の調査[3]では、矛盾する二文を目にした際の印象を分析した論で、「知的矛盾」「感情的矛盾」「意思的矛盾」という分類を立項しアンケート調査をおこなっている。また、木下冨雄[4]はうわさに関する講演の中で、以下のような発言をおこなっている。

つまりうわさは、不足する情報を自分の内的世界で補うこ

とにより、事態の意味づけをする、解釈をするというメカニズムによって発生するといえよう。したがって逆に言えば、うわさに夢中になっている人を見ると、その人がどういう内的世界、どういう感情や欲求を持っているかが、全部透けて見えることになる。

木下冨雄「うわさはなぜ歪む？」[4]

「解釈」の連鎖は、それが確定してしまわないことによって永続性が保証されるが、「解釈」そのものは情報量の不足と命題の矛盾がそれを支えているのだ。

4　村長を追う　あるいは　父の記録が語る

その後「私」は、父と村長の後を追い海に出る。私が別の島に到着した時には、父と村長は既に島を出た後であったが、それまでの経緯を、島の詰所に残されていた父の記録によって「私」は知ることになる。

これは噂話ではない。平仮名で書くことにする。英五郎が自分に、村の窮状を訴えに行くから同道するようにと云ったのには、またかと思った。大体、大雨が降ってくるから、刈入を早くするようにと云ったのも彼英五郎なのだ。自分は英五郎に何故そんなことをするのだ、そういう、いわれもないことを、何故自分に云いつけるのだ、と聞いた。　（72）

「本島噂話集」がカタカナで書かれていたのは理由があった。この記録は漢字かな交じり文であり、ここに「うわさ／記録」の違いが意識されていることは確かである。だが、これまでの経験で父は「うわさ」が人為的な所産であることを知っていた。つまり、ここでの真の対立は「真実／嘘」なのである。

村長は「村の窮状を訴え」るために出かけたのだから、実はより上位に位置する「外部」の存在を知っていたことになる。現在の村長は「ケンリ事件」以後の中興の祖であるが、初代英五郎は、おそらく何かしらの形で「外部」とその「優／劣」を確信するに至ったのであろう。「うわさ」はむしろその「真実」を打ち消すために利用されるのであるから、「本島噂話集」に「真実」が記録されることはない。

流れ着いた島が「大ケンリ島百四番島」であり、自らの島が「百五番島」であったことを、島の「見張り人」から聞く。ここで父と村長は半年の間ここで見張り番とともに過ごすことになる。

彼らが長期にわたり百四番島に留まっていた表向きの理由は、見張り人が眠ってしまうことの監視（仕事を手伝う）のためであったが、その実、島に張り巡らされている「壁」の向こう側を知りたいという欲望が背景にあり、隙を窺っていた。各島には煙突があることが海上からも確認出来るが、壁がその煙突の正体を阻んでいるのだ。

後から追いかけた「私」も島に漂着した際には「眠っ」てしまっており、見張り人に目覚めさせられることから「外部」の物語が始まる。以後「私」は大ケンリ島の「トリコ（＝人質）」と

なる。父や村長が島の「真実」に辿り着くためには、やはり見張り人の「眠り」が必要であった。島へ帰還する村長は伏せって倒れてしまい村人から死んだものとみなされる。「外部／内部」の移動の物語は「眠り」が重要なキーワードとなっている。

見張り人とのエピソードで重要なことが二つある。一つは見張り人が父や村長たちの「ニヤニヤ笑い」を独特なものとしてみなすことである。早川治子は外国人から指摘される日本独特の笑いの印象を以下のように指摘している。

「ジャパニーズ・スマイル」という表現がある。日本人は意味なく笑うとも言われる。しかし、それは本当に意味のない「笑い」なのだろうか。むしろ反対に、きわめて意味のある日本的な表現活動なのではあるまいか。[5]

幕末から明治期に日本を訪れた多くの外国人は、その見聞録等でやはり日本人独特の笑いを、その印象の筆頭に挙げている。例えば、小泉八雲は日本の印象録（『知られぬ日本の面影』一九八四年）において以下のように語っている。

日本人の微笑は、当初は魅力的なものなのである。ところが後日、その日本人の同じ微笑が、異常な状況において、例えば苦痛とか、恥辱とか、落胆などの場合においても、同様の微笑が見られたりすると、そこで初めて、外国人は日本人に不審の念を抱くようになるのである。

こうした笑いは照れ笑いとも異なり、そもそも現状の判断停止に伴ったものであることが多い。言語的記録による判断に依ることが出来ない村長も父も「外部」世界の「真実」を目の前にどう考えてよいのか途方にくれているのだ。

もう一つが、見張り人が眠りにおちてしまった際に、その制服や帽子を身に着けると目的の分からぬ仕事に対する不思議な使命感のようなものが生じるという場面である。

私はもう一つ気がついたのは、次のことだ。監視人は塀の中にいるかも知れないが、それより、私の眉間のところにいるということなのだ。このことを知ったのは、帽子をかぶって半日ぐらいしてからだ。それは声を立て督励するのでもないが、声なき声となって、私自身の力をかりて私をあおっているのである。この重たい帽子を「ヒゲ」がぬごうとしないわけもよく分る。ぬごうとするどころか、ぬぐことが既に大へん失礼なことのようなのだ。誰に対して失礼か、それはちょっと云いにくいが、とにかくそういったものなのだ。それはへんな形となってあらわれた。（88）

見張り人は「命令者」と呼ばれるものに命を受けている。だが、見張り人は特定の人物以上に、抽象的な「命令者」を内面化している。そして、制服の着用は誰にでもその内面化を促進させる。仕事や使命の義務を服が象徴しているのではない。服の着用こそがその人間に内面を付与しているのだ。これは、島の言語と同じである。言語（記録）は「事実」を残さない。常に言語（噂）は

「事実」を創り出す。そしてそれは島の「外部」でも同様なのだ。

5　貨幣経済という闖入者

遅れてきた「私」のもとに来たのは「確認者」と呼ばれる者であった。確認者の命令で「私」は快速艇に乗せられる。よくわからない目的地に向かう途中、大きな船に出会う。それは、百五番島に米を運ぶ船であった。同船には若い漁夫たちも乗っている。船長と確認者の無線会話から、男二人（父と村長）が乗った船が近くを走行しており、この二人も何とか百五番島にたどりつかせよという命令を受けていることが分かる。

> さっきから報告したものかどうか、迷っておりましたが、奇妙な現象が起きてきました。臭いです、第百四番島から吐き出している、あの臭いです。あいつがこの上空に澱んでこの海域を蔽っているようです。彼らは眼をさましました。臭いに気がついたらしい様子です。途方にくれています。こんなにヒドイものとは、私も思いませんでした。これは確認者どの、大へんなものです。実地にその経験を持たなければ分らないものです。何がまざっているのですか。かなり人間を侮辱した臭いです。（113）

島を苦しめていたあの「臭い」は、百四番島の煙突から出ているものだったのだ。百四番島以外の島にも「煙突」が存在する以上、これらの島は同様のものを吐き出しているのかもしれない。それが何なのかははっきりと描かれないが、空気中に漂い上空（島の高い所）から落ちてくる何かである。

一方で「私」は「確認者」に「約束」という名の契約をさせられる。

> お前はオレの人質になるのだが、オレに可愛いがられるも、可愛いがられないも、お前の気持一つだ。オレは今では第百五番島のやつのことばかり考えているので、人質にするのも、つまりはお前のためなのだがな。お前はお前なりにその約束をしろ。オレの云うことは何でもするということをだ。その、オレの云うことは、ちゃんとオレ達から衣服を着せてもらい、オレ達から給料をもらい、食わせてもらう、ということだ。それは、この男も（彼はそこで声を落して私の耳もとでささやいた）若い漁夫にしたって同じことだ。（後略）」（106）

こう見れば、過去に若い漁夫たちの持ち込んだ（今も持ち込もうとしている）米は労働の対価（給料）だったのだと分かる。島の若い漁民たちは、島の「外部」を支配する経済システムに組み込まれていたのだ。

近代になっても、農民と狩猟、農民と漁業など交換による自給自足を可能にしていた地域は存在していた。例えば、水俣病で知られる地域、特に水俣市周辺では、一九三一年に日本窒素肥料株式会社（後のチッソ）が、アセトアルデヒドを安価に触媒する技術を発明し、酢酸ビニルなどの多くの製品化に成功する。これが、この企業を一気に成長させ、太平洋戦争を挟み同地の経済的基盤

となる。地域の住民の殆どは、何かしらの形でチッソと関係する職に就かざるを得なくなり、農業、漁業中心の地域は一気に貨幣経済の仕組みに巻き込まれることになる。

アセトアルデヒドを生成する際に生じるメチル水銀は利用価値がなかったため、工場排水とともに水俣湾に放出され、内海であった同湾内部に蓄積。そこの魚介類に取り込まれた結果、それらを食した人々が水俣病を発生するに至った。

戦後のチッソが急速にアセトアルデヒドの大量生成に踏み切ったことは、同地をいち早く経済復興に導いた面も否定出来ないが、同時に、原因不明の「奇病」も激増した。

一九五四年の病の「公式報告」から原因特定にはかなりの年数を有することになったが、それにはチッソの証拠データの隠蔽とともに、原因を疑う地元の被害者の人々の心理的葛藤も大きく影響していた。どんなに疑わしくとも、地域はチッソなくしては生きていけない人々がたくさんいたからだ。自らを殺す原因と生かす原因が同じ権力にあるとき、人々はそこから動けなくなる。動けなくなることに気が付いたときには、既に経済的支配から逃れられない。

周知のとおり、戦後社会には大きく分けて二つの経済システムが存在していた。日本はサンフランシスコ条約の「署名」により独立国家であると同時にアメリカの経済システムの傘下に入った。つまり自由主義経済のシステムに参入させられたわけだ。

戦後の冷戦構造の中、日本は国内法によって核技術の軍用転用を禁止した世界で最初の国となった。しかし、同時に日本は世界唯一の被爆国であり、戦後最初の核実験の被害にあった船は日本のマグロ漁船であった。

こうした問題をテクストに当てはめてよむことは容易い。しかし、物語は同時にもう少しマクロ的な寓喩性、近代国民国家の世界情勢を見据えたそれとしてとらえる方がより興味深い。

「私」が連れていかれたのは百一番島である。「百一」という島がそれ以後の島を統括しているのだとしたら、それ以前にも同様な組織が複数あり、それらを統括しているものは……、という無限後退に陥る。百一番で行われている「救済審議会」での演説や会話を盗み見る（聞く）ことにより、「煙突」は工場から出ているものであることを知る。工場には見知っている漁民たちも労働しており、あの漁民たちの米は工場労働の給料であったことも明らかになる。

労働によって経済社会に組み込まれ、出稼ぎ先の労働の場としての工場が排出する煙によって故郷が公害の犠牲となる。まさに、前期資本主義システムの様相そのままである。

「工場の中を外にも及ぼせ！」「余力を以て他の島を救済せよ」「世界の人々を愛せよ」といった救済協議会で叫ばれるスローガンの数々は、近代国家が後進国を「啓蒙」という名のもとに「愛」し、そして「救済」しようとしたことと何も変わらない。

章のタイトルにもなっている「昆虫」とは、確認者が「父」や「村長」に対して使った蔑称であるが、百五番島の「外部」の人間たちは「啓蒙」しようとしている相手の存在を利用して自らを「人間」たらしめているわけである。確かに、そこには自分たちは「昆虫」ではないという意識が反映されているが、「章」全体からそれを見つめる視線の存在は、そうした双方の営為そのもの

を相対化し「昆虫」と呼んでいるのではないか。

「島長」「確認者」「秘書」とそれぞれが、何かしらの意図をもって暗躍するこの世界とは、実はどこにも「外部」など存在しない世界である。

6　密使から使節へ　あるいは　噂から法へ

父と村長を無事に上陸させるため、船長は自らが「密使」となり極秘に「噂男」を捜すことにした。うわさを利用して漁民や村長、父たちが村に米を持ち帰った英雄にしたてようと企んだのである。だが、この目論見は、漁民たちの勝手な行動によって台無しになる。だが、漁民たちは米＝経済を島に持ち込むことを阻止しようとしたのではない。むしろ、より円滑な方法で島に持ち込もうとしていたのである。

密使たちの一団は、「ハンドル」「テコ」「ハンマー」「センバン」「ベルト」「ギア」などという隠語で称される。これらの隠語が象徴しているのは、何か大きなあるいは重いものを運び入れようとする意志である。考えるべきことは恐らく二点。ひとつは、彼らは島に何を持ち込もうとしていたのか。もう一つは、村長（センバン）は受け入れられず、父（ベルト）のみが島に受け入れられたのは何故か。

前者が米そのものではないことは明らかである。繰り返し述べてきたように、「外部」から流入する米は経済システムそのものなのである。本島は経済力によって他の島を支配しようとしているのではない。経済システムに引きこむことによって「内部」の「他者」として支配しようとしているのである。それは、搾取というより根源的な支配体制である。

後者は、彼らが島に持ち込もうとしているものに大きなヒントがある。彼らが持ち込もうとしていたのは「百五番島」と書かれた「立札」である。彼が島に残した「外遊」の記録は確認者によって「法律」と書き換えられていた。父が持ち帰ったものは、うわさというパロールしか存在しなかった島に、法というエクリチュールを持ち込んだのである。

J・デリダは、『法の力』において「法の脱構築」を展開するにあたり、「掟（loix）が信奉されているのはそれらが正義にかなうからではなく、それらが掟であるからだ」というモンテーニュの『エセー』の言葉を引き、「暴力」を排除するためのいかなる法であっても、その施行時には「暴力」が存在し、法はそれを隠蔽する形で働くことを指摘している。同様にベンヤミンの『暴力批判論』によれば、法には法を措定する暴力（Rechtsetzende Gewalt）と法を維持する暴力（Rechtserhaltende Gewalt）があり、この暴力が法の理念とするどく対峙していることを指摘している。

法は暴力を抑制し治安を維持するものである。だが、常に法は文字として残ってしまうが故に、現実の「正義」とズレてゆく。法を脱構築できるのは、法と対峙する「正義」だけであり、村長は、外部の世界の隠蔽や噂による意志決定がもはや「正義」ではないという事態を引き受け殺された。そもそも、この島には「殺人」という暴力が存在しなかった。「殺す」ことを「正義」にしてしまう「敵」というものが存在しなかった。初代英五郎が自ら

導入した「敵」という概念を受け、自らが発案した「竹槍」で殺されたように。歴史はくり返す。

一方、父（ベルト）は、この島が「百五番島」であるという文字（概念）により「外部」を持ち込み、より上位の「外部」により規定された文字（法）を運び込んで島を閉塞世界から解放した。比喩的に見れば、「センバン」とは固定機械。他のものが移動の操作や伝達に関わるものであるとすると、「センバン」が五代にわたって「固定」していたものの終焉を意味していたのである。

漁民が工場労働によって米を持ち込むようになると、その「労働」は二次産業となるが、そもそも漁民は自らが作っているものを知らない。一方では、農民の米作は資源採掘（一次産業）と同じ位置になる。この言い方は正確ではないかもしれない。米を媒介にして両者の差異は暴力的に消滅させられたといった方がいいか。

島にかつてあった田は広場に化し、そこに人々は集まり、映画が上演され、拡声器により「ケンリ音頭」が流され村人の歓喜がピークに達すると曲は「栄光の人」になる。音楽は土俗的なものから、画一的な音階によるものにとって代わられ、目も耳も画一的なメディアに支配されてゆく。

「内部」から発する（ように思われる）「うわさ」よりも、「外部」から規定される「法」や「外部」とともに締結される「契約」に従い人々は、言葉による「会議」に明け暮れるようになる。だが、会議は言葉の循環に終始して永遠に終わることはない。

「外部」世界を認識した新しい島長は自らを「救済」する「外部」へ「報告」をするが、「確認者」に確認されたその「報告」はさらに「外部」へ伝達し何処に伝達するのか分からない。そもそも、何を「確認」されているのか。「確認」されることによって何が「救済」されるのか。齎されるのは「米」、流出してゆくのは「労働」、その循環のみが永遠に続いてゆく。

7　夢が現実か　あるいは　現実は夢か

「私」は「契約」によって「本島」側の人間になり、「父」は島に帰り「島長」として「政治」にかかわる。

一、被害田畑ノ、今年度ノ損害俵数ニ就テ届出ヲサセ、ソレカラ一率ニ二割ヲ差シ引ク。
二、来年度モ右ノコトヲ改メテクリカエス。
三、被害田畑デハナイノニ、被害ヲ受ケタト称シテ耕作ヲ怠ケル者ガアルトイケナイカラ、コレヲ監視スル委員会ヲ設ケル。（委員会トイウノハ私ノ独創ダガ、コンナ言葉デハドウカナ）
四、煙ノ次期襲来ヲ考エテ、イツソノコト、全部、頭数、年齢別ニシテ一率二分配スル。

島長からの提案は、右記のような文体で書かれる。一見、島を出奔する前の「本島噂話集」のようだが、その意識は大きく異なる。ここで述べられているのは、平等分配への配慮及びに労働の監視という「法」、そしてそれを行う「委員会」という言葉の創

造である。また、島長の提案のうち「四」にあげられている徹底した「平等」分配に関しては難色を示している点も重要だろう。「救済」は永遠の「救済」を意味しない。「労働」による自助努力によって自らも生産主体になってもらうことが「救済」の真の目的だからだ。

また、この判断の主は「漁民」たちを連れてきた「船長」であったことも注目しておいてよい。「船長」は「報告者」の位置であるが、単なる媒介者以上の「判断」をしている。それが時に「越権行為」となることがあっても、それは全て「報告」されることによって、責任主体となることも回避される。

また、島長が眠っている間にも「会議」が行われ、そこで権蔵が島長のやり方を批判していることからも分かるように、明文化された言葉が支配するようになった世界でも、うわさ（パロール）の力が滅びたわけではない。「器械」の力を得たパロールは別の力をつけ、常にエクリチュールの権威に揺さぶりをかける。

一方、大ケンリ島の一員となった「私」は、番外島で煙から「硫酸」をとる仕事に従事している。現実の日本が島国であり地震大国であることを思い起こせば、「硫酸」が硫黄と酸素が混じった世界の寓意となっているように思える。だが、一方で「煙」は島外から来る。「放射能」の謂であるように思える所以であるが「煙」の最大の特徴は見えないことである。テクストから確実に言えることは「煙」が「労働」の結果として生じる副産物であることであり、それは「近代」社会の「発展」にとって向き合わざるをえない「業」のようなものであった。

大人となった「私」は、かつて子供であるが故に避けられなかった二つの事項について思い起こす。一つは「煙が来襲しなくなる」とは、「煙」が廃棄物ではなく「必要な資源」となったからであること。もう一つは「ケンリ」諸島の「構造」についてだ。

第二に私は奥へ行くことによって、この大ケンリ島の中心部に近づくことが出来るとばかり思った。そこへ行けば、私はこの世界のことは一層よく、というより、初めて確実に分ると思ったし、当然の結果として、故郷の「島」の情報は一層よくつかむことが出来ると信じていたのである。これは全くの私の思い違いであった。何故なら私が連れて行かれたのは、なるほど中心部に遠くはないかも知れないが、それは番外島という島であった。（221）

ケンリ島の数字には九百番台まで増大している。ケンリ島の数字とは起源を失いつつ永遠に拡大し続ける「救済」圏のことだ。数字はどんどん拡大しつつも、起源に近い数字は次々に忘却されてゆく。二桁の島は、既に存在しているのかも分からない。

つまり私と同じ人質のかたちでここへ送られてきているのだが、我々の間で「留学生」がいるというふうに、云われはじめると、お互いひけ目をかんじてそ知らぬ顔をし合った。私にしても異様な目にあっており、そういう目にあっていない人には想像も出来ないほど大きな被害を受けて（人間が煙におそわれる！）いるということは、知られるのが恥辱であり、自分までが愚かな人間に思われる可能性があるのだった。

そんな目にあっていいように出来ている人間、人間でなくてそれこそ昆虫。（222）

「救済」が「ケンリ」を得るための条件であるならば、それは「救済」が齎す「被害」にも甘んじることを意味する。だが、かつて「被害」にあってもいいような人間であったことは知られずにいたい。それが「昆虫」から「人間」になることだからだ。

つまり「競争」をつづける。そしてその競争相手の、「島」の状況は伏せられているときている。誰も一様に臭いになれて、かえって臭いがないと飯が食えないという状態になるまでは、私は人知れず悩み、郷愁を与えかねないその煙の中で、煙の襲来の様子を想像し、意慾をふるいおこし、戦うのである。（223）

「昆虫」から「人間」になることは「恥」を「技術」で克服することだ。だが、ようやく「技術者」となった「私」が百四番島に来た時には、百五番島は歴史上消えたものとされていた。それは「救済事業は、完了したことが確認された」という言葉によって。煙は止まり巨大なエントツは「記念塔」となった。エントツのもとには、以下の様な言葉が刻まれた鉄板が取り付けられていた。

これは必要あって巨大となり、その英姿から多量な煙を吐いた。我々がこれを記念するのは、徒らにその巨大さのためのみではない。その巨大なる姿を見る度に、その煙の量に思いを致し、これを有効に使用せんとの意図に出さしめたところの功績のためである。つまり技術の進歩を記念するためであり、それを促した功を讃えるためである。

某年某月某日　　第百四番島島長　某

ここに逆説的な形で記録されているのは「救済」の犠牲となったものたちのことだ。「救済」の「完了」とは歴史上の記録からの忘却である。十番台の島々、百五番以降の島々が存在しないように。これらの「忘却」を伴って島々の数字は増大してゆく。何処に何のためになのか誰にも分からない。近代世界は茶番なのか。

私は岸に上り道の上に立ってもう一度見渡し歩いて見た。そこまでくると、もうエントツは見えないのである。するとどこからともなくイビキ声が聞こえてきた。彼は岩と岩との間の窪地に寝ていたのである。近よって私が揺ぶっても、いよいよイビキは高くなるばかりで、容易に目を覚す気配はなかった。（229）

「私」のケンリ島員の物語は「睡り男」の「睡り」の中での物語である。かつて、ベンヤミンがあるいはボードリヤールが語ったように、経済的記号に支配されている「現実」と記号の運動のみが支配する「夢」の世界は、容易に反転する。「睡り」から始まる「外部」世界に取り込まれた「内部」。まさに、近代社会そ

のものである。そこに「現実」／「夢」の違いは存在しない。「睡り男」は永遠に目を覚ますことはない。

注

（1）『小島信夫長篇集成①』水声社、二〇一五年一一月

（2）千石英世『小島信夫　暗示の文学、鼓舞する寓話』彩流社、二〇〇六年一二月

（3）辻岡美延・西田晃一「2文によって惹起された矛盾事態の認知構造の分析――矛盾性評定の因子分析―」『関西大学　社会学部紀要』第二一巻第二号、一九九〇年三月

（4）第八回こころの広場「うわさはなぜ歪む?―うわさに秘められたこころの秘密」京都大学こころの未来研究センターが二〇一〇年一〇月一六日におこなった講演の記録。（http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/new8/　二〇一三年一〇月三〇日に確認）

（5）早川治子「日本人の「笑い」の談話機能」『言語と文化』第7号、文教大学、一九九五年七月

本文の引用は『小島信夫長篇集成①』水声社、二〇一五年一二月に依っている。引用部の末尾（）の数字は、引用ページに相当する。

（ひきた　まさあき　東京学芸大学教授）